

「フライト・オブ・フェニックス」

☆☆

☆☆

2005（平成17）年3月11日鑑賞<東宝試写室>

監督：ジョン・ムーア

フランク・タウンズ/デニス・クエイド

エリオット/ジョヴァンニ・リピシ

AJ/タイリース・ギブソン

ケリー/ミランダ・オットー

イアン/ヒュー・ローリー

20世紀フォックス映画配給・2004年・アメリカ映画・115分

<美しい砂漠比へ>

この映画には、美しい砂漠のシーンが再三登場する。冒頭は、その美しい砂漠の上をちょっと変な形(?)をした1機の飛行機(貨物機)が飛んでいくシーンから。この状況設定は、1997年にアカデミー賞の最優秀作品賞、監督賞など9部門を受賞した、あの感動作『イングリッシュ・ペイシエント』の冒頭シーンとよく似ている。しかし、『イングリッシュ・ペイシエント』が第2次世界大戦中の北アフリカの砂漠を舞台としていたのに対し、こちらの砂漠はモンゴルからの帰路にあるゴビ砂漠。このように場所は全然違うものの砂漠の美しさは同じだし、また、一瞬の判断の差によって生と死を分ける砂漠の厳しさも同じ・・・。

<狭い空間は潜水艦モノと同じ・・・?>

この映画の舞台はゴビ砂漠だが、そのど真ん中に不時着した飛行機の機長や乗員にとっては、移動することが不可能な限定された狭い空間。したがって、約2時間のこの映画の舞台は、そのほとんどすべてがこの限定された狭い空間。そんな中で展開される人間ドラマの登場人物たちは、機長のフランク・タウンズ(デニス・クエイド)と謎の男(?)エリオット(ジョヴァンニ・リピシ)を中心とした10名の男女。たった1人の女性は、モンゴルのタンサグ堆積盆地での石油の採掘現場で主任をつとめていたケリー(ミランダ・オットー)だ。採掘業務の打ち切りによって、傷心のまま機材とともに貨物機の中に乗り込んだ乗員たちが、すさまじい砂嵐に襲われたことによって不時着したのは、ゴビ砂漠のど真ん中。しかも季節は真夏と最悪!乗員たちは機長の操縦テクニックのおかげで命びろいしたことに感謝したものの、当然そこにはたくさんの波乱・内紛要因が・・・?第1の関心事は、果たして救援は来るのか、ということ。そしてさらに、食糧や水は大丈夫か?助けをじっと待つのがベストな途か?それとも他の選択肢があるのか?etc. 内部での権力争い(?)を含めて、その狭い空間の中で展開される人間ドラマは、まるで潜水艦モノと同じ・・・。こりゃ、面白くて当たり前・・・?

<どちらのタイトルが好き・・・?>

この『フライト・オブ・フェニックス』は、1965年に製作され、ジェームズ・スチュアートが主演した『飛べ!フェニックス』のリメイク版とのこと。私はこの映画を観ていないので、内容面での対比はできないが、タイトルは断然旧作の方が直接的でわかりやすい。そして感動的!広い広い砂漠の中の、ごく限定された不時着地の一点だけを舞台に展開される約2時間の人間ドラマのラストは、やはり手に汗を握りながら、「飛べ!フェニックス」と念ずるものでなくっちゃ・・・。

<もう1つの『翔べフェニックス』>

去る2005年1月17日は、阪神・淡路大震災の10周年記念日にあたる日。私は阪神・淡路大震災については、芦屋中央地区のまちづくり協議会の顧問弁護士として、復興土地区画整理事業に長年関与したため、「あれから10周年!」ということに大きな感慨がある。そんな私の長年にわたる震災復興まちづくりの活動の想いとは別に、兵庫県を中心とする各種の行政機構においても、10周年を記念して数多くの記念行事やイベントそして記念出版が行われた。その1つが、財団法人阪神・淡路大震災記念協会による阪神・淡路大震災10周年記念出版。この本は800頁弱の大著だが、何とそのタイトルは、この映画の旧作のタイトルとちょっと漢字は違うものの全く同じ、『翔べフェニックス』というもの。サブタイトルの「創造的復興への群像」を読めば、その具体的な意味・内容は明らかだが、この『翔べフェニックス』というタイトルは、あらゆる領域に共通する何とも前向きで刺激的なもの・・・?

<謎の人物のエリオット>

貨物機が石油採掘所に飛んだのは、そこでの石油採掘業務撤退のためだから、貨物機の中に乗せる人間はその会社で雇われていた人間であるはず。ところが、その中になぜか1人だけ謎の男エリオットがまじっていた。エリオットは、砂嵐の中を強引に突っ切ろうとした機長のフランクに対して、貨物機は機材をいっぱい積んでおり、機体が重すぎるから強行突破は無理だ、とエラく専門的な忠告をした変な男・・・?そのエリオットは、不時着した後フランクの示す方針に対して、生き延びるための新たな提案をした。それは何と、飛行機の残骸のうち使えるものをうまく組み合わせて、新しく飛行機を造るという突飛なもの。そんなバカな!そんなことができるのか?と一笑に付すフランクらに対して、エリオットは「ボクは飛行機的设计技師だ!」と宣言したから、フランク以外の乗員たちは急遽エリオットの意見に傾いたが・・・。

<フランクの示す方針は?>

不時着した貨物機の機長であるフランクの示した方針はわかりやすい。それは、ただそこにじっととどまって救援を待つというもの。食糧や水はかなりの量が確保されているから、体力の消耗を防ぎ、とにかくじっと待つこと。多分それがベストの方針だし、他の選択肢はエリオットからの突拍子もない提案以外はあり得ないはず。しかし、誰もが救援は必ず来ると信じている、いや信じたいものの、ただじっと待つことは人間にとって最もしんどい作業。「俺は会社にとって重要な人間だから必ず救援が来る」と信じ、そのように発言するイアン(ヒュー・ローリー)もいるが、「会社はモンゴルのタンサグ堆積盆地での石油採掘は採算が合わないために撤退したのだから、高い経費をかけて可能性の薄い乗員の救出に向いて来ないかも・・・?」という「不安論」の方が主流になるのも当然・・・?

そんな中、厳しい気象条件の中で砂漠の事故に巻き込まれて命を失う者が現れたり、「俺は歩いて砂漠を渡る」という人間が登場したり、映画は次々と物語をつくっていく・・・?その結果、みんなが一致団結してフランクが指示した方針を維持していくことは次第にできなくなり、遂にフランクもエリオットの提案をのむことに・・・。

<一致した目標さえあれば・・・>

この映画が描く約2時間の人間ドラマの中で最も理解しやすいのは、エリオットの提案に沿って新たに飛行機を造ろうと一致団結して力を合わせて作業していく過程における人間の姿。要するに、これがベストの途で、飛行機を完成させれば生き延びることができるのだと信じることができれば、みんなイキイキとした顔で作業をしているし、内輪モメもない。こんなシーンを観ていると、リーダーの資質とは、とにかくみんなを納得させ、頑張ることができる方針を明確に示すことだということがよくわかるが・・・。

<失敗や内輪モメがつきもの・・・>

ところが他方で、人間が集団でやる作業には失敗や内輪モメがつきもの。機材不足そして劣悪な気象条件の中でみんなよく頑張っていたものの、この映画はそんな人間の努力をあざ笑うかのように、さまざまのミスを誘発させていく。そして、内輪モメの最たるものは、こんな状況下では「水問題」。すなわち、水泥棒の発生だ。こんな劣悪な状況下で、飢えや渇きに堪えて飛行機造りに励んでいるこの集団の統率力や民主主義の成熟度は大したものだが、ある日誰かが水を余分に飲んでいることが発見されたらどうなるか?そして現実にそんな事態になったから、さあ大変!さて、それは誰の仕業なのか・・・?そんなことをするのはきつと・・・?答えはそのとおりだが、みんなから糾弾されたことに対するその「犯人」からの反論が振っているの、それは是非映画の中で・・・。

<興味深いエリオットの人物像>

この映画の主人公はフランクだが、彼のキャラは比較的単純でわかりやすい・・・?むしろ人間的に興味深いキャラは、飛行機的设计技師(?)のエリオット。このエリオットは、いくつかの場面で「エー!」という言動を示すので、是非それに注目されたい!その第1は、前述の水泥棒の件。第2は、遊牧民(?)とのトラブルに巻き込まれた時に示す彼の何とも割り切った(?)冷酷な(?)行動。第3はフランクとの権力争い(?)がピークに達した時。そして第4は、飛行機が完成し、いざ出発となった時。この第4の、あっと驚くエリオットの謎はすごく面白いものだから要注意!そして第5は、映画がすべて終了し、字幕が流れてくる中で表示されるエリオットのその後・・・?

<色気ゼロ、純愛度ゼロも一興か・・・?>

純愛映画全盛期の今(?)だが、この映画に限っては、登場する女性がケリーの1人だけ。そのうえこのケリーが女性の魅力を発揮するシーンもゼロだし、機長のフランクといい雰囲気になろうとするシーンもゼロ。せいぜい無事飛行機が飛び立った後、フランクの頬にチュキキスするシーンが1つあるだけ。その意味において、この映画は狭い空間内における人間ドラマを徹底させたうえに、わかりやすい「飛べ!フェニックス」という最終シーンに見どころのすべてを集約させたもの。したがって、良くも悪くもこの映画は色気ゼロ、純愛度ゼロだが、それも一興か・・・?

2005（平成